

## 音楽科における異年齢集団学習の試み (1)

菅 裕<sup>\*1</sup>・藤本いく代<sup>\*2</sup>・阪本幹子<sup>\*2</sup>・竹井成美<sup>\*2</sup>  
稲野さやか<sup>\*3</sup>・石川優子<sup>\*4</sup>・栗野聖子<sup>\*4</sup>・山下さちか<sup>\*5</sup>

### A Difference Age Group Learning in Music Class (1)

Hiroshi SUGA, Ikuyo FUJIMOTO, Mikiko SAKAMOTO, Shigemi TAKEI  
Sayaka INENO, Yuko ISHIKAWA, Seiko KURINO, Sachika YAMASHITA

#### 要旨

宮崎大学教育文化学部附属中学校と宮崎大学教育文化学部附属小学校では、5年前から中学校第3学年音楽選択クラスと小学校5年生との合唱の合同授業を実施してきた。今年度は、中学生の事前学習として、楽譜の中から必要な情報を取り出し、その意味を明らかにして説明・表現をするための「読解力」の育成を計った。合同授業を通じて、小学生の声の響き、テンポ感、また特に強弱表現のメリハリは格段に向上した。しかしながら、小学生だけでなく、中学生の側の音楽的な学びのプロセスや成果をどのような方法で評価していくかが課題として残った。

#### 1 はじめに

##### 1.1 音楽の社会的性格

音楽科の特徴は、学習の対象である音楽それ自体が、社会的コミュニケーションの一形態であるという点にある。音楽が社会的存在であることの意味は、単に音楽が集団で演奏されることが多く、また多くの人を楽しませるものであるという点だけではなく、音楽それ自体が社会的価値の表現であり、共有であるということを指している。

竹下は、音楽の社会的性格について次のように述べている。

歌うことは、それを「内的聴感」で受け止めながら、「一般化された他者」からの評価に応えるように歌う側に指示を与えるという意味において聞くことでもあり、聞くことは、やってくる音をこちらから出向いて受けとめ共感するために、内面で積極的に歌うことでもあるという、音楽体験のもつ社会的性格が明らかとなった<sup>1)</sup>。

\*1 宮崎大学大学院教育学研究科

\*2 宮崎大学教育文化学部

\*3 宮崎大学教育文化学部附属中学校

\*4 宮崎大学教育文化学部附属小学校

\*5 宮崎大学教育文化学部附属幼稚園

つまり歌うことも聞くことも、常に内面化された他者を意識するという意味において常に社会的な行為であるといえる。

また合唱や合奏などのアンサンブル演奏の質を高めていくことは、単に個々の演奏者が「上手に」演奏するだけでは成立しない。自分や他の演奏者の役割を理解し、他の演奏者の声や音を聴き、全体の響きを意識ながら、自分の演奏を調整していくことが不可欠である。

このように考えると、音楽は本質的に集団による学習を要求する教科であるといえる。

反面、音楽を集団的に学ぶことには困難な課題もある。なかでも最大の問題は、能力差の顕在化である。スポーツや音楽などパフォーマンスを中心とする教科は、生まれつきの才能や先行する経験の多寡によって個々の成員の能力の格差が他者の視線にさらされやすい。このことが自尊心や自己効力感の低下につながり、学習意欲を減退させたり、学習集団を不安定化させる要因ともなる。

## 1.2 異年齢集団の特質

異年齢集団の特質として成田は、「同年齢の成員から構成される集団に比べて、成員同士が対等の立場で競争する意識」が薄く、「能力や経験など相互の違いが尊重」され「互いの差異を尊重しながら、集団を維持しようとする立場で活動が展開されること」をあげている<sup>2</sup>。

こうした点から音楽科における異年齢集団学習は、同年齢集団学習における能力差の顕在化によって生ずる問題を解消し、個々の児童・生徒が自分の役割や能力に応じて全体の目標に寄与できる理想的な集団的音楽学習の場となることが期待できる。

宮崎大学教育文化学部附属中学校と宮崎大学教育文化学部附属小学校では、5年前から中学校第3学年音楽選択クラスと小学校5年生との合唱の合同授業を実施してきた。この合同授業では、中学生が学習集団のリーダーやモデルとなり、小学生に対し、発声法や表現方法の指導を行う活動が展開されている。ここでは平成20年度の合同授業の成果と今後の課題について報告する。

## 2 音楽科における異年齢集団学習の実際

### 2.1 中学生の事前学習：「読解力」の育成

前年度の合同授業の反省として、中学生の指導の内容及方法と小学生が期待する学習内容との間にギャップがあり、学習の中で双方が戸惑う場面が見られたことがあげられた。これは指導する中学生の側の指導者としての事前の準備や態勢づくりが不十分であったためと考えられる。小学生に対して自信を持って指導させるためには、教材となる楽曲を分析し、指導のポイントを明確にさせておく必要がある。

そこで今年度は、中学生の事前学習として、楽譜の中から必要な情報を抽出し、その意味を明らかにして解釈・表現をするための「読解力<sup>3</sup>」の育成を計った。

音楽における「抽出」は、楽譜や音楽そのものから演奏に必要な情報を深く読み取ることであり、音楽用語など基礎知識の理解も必要となる。「解釈」は、曲の構成要素や特徴についての理解である。さらに「表現」が、創造的に演奏する段階に当たる。

小学生に伝えるべきことを楽譜から読み取り、どんな言葉で相手に伝えていけば良いのかについて考えさせるために、次の質問を含むワークシートに取り組みさせた。

【抽出】に関する設問①「今日から明日へ」はどのような内容を表していると思うか自分の言葉でまとめよう。

<生徒の回答>

- 歌詞の中にも、「元気出して、笑い飛ばして、心は躍る」とあるように、今日を生きていく中で明るく楽しく明日を生きて行こうという意味があると思う。
- 楽しい仲間が集まれば、どんな違いがあってもいろいろな国の人とも差別なく過ごせると思う。明るく明日を生きて行こう。
- 友達を大切にして、差別のない世界を表現していると思う。

【解釈】に関する設問②また、歌詞の内容から考えて、どのような気持ちを込めて歌うべきか自分の考えをまとめよう。(音楽用語を用いて)

<生徒の回答>

- 最初のラララは、明るい気持ちで全員で心一つにしてフォルテで歌う。
- 最後のラララは、明日への希望をこめてクレッシェンドにしていく。
- 全体的にテンポが速いが、明るい曲想なので楽しくリズムに乗って歌う。
- 明るくて元気が良い詩なので、Allegroを意識して歌う。

## 2.2 中学校第3学年選択音楽・小学校第5学年合同授業実践：単元名「豊かな表現を目指して」

### 2.2.1 指導過程

学習活動及び学習内容	中学生の動き	教師のかかわり
1 合唱をして、小学生の現段階の状況を把握してもらう。 <input type="checkbox"/> 小学生の演奏 <input type="checkbox"/> 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">             中学生からポイントを学んで自分たちの演奏に生かそう。           </div>	1 小学生の合唱を鑑賞する。 <input type="checkbox"/> 中学生の感想発表 <input type="checkbox"/> 本時のめあて <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">             自分たちのもっている知識・技能を生かしながら、小学生に音楽を伝えよう。           </div>	<input type="checkbox"/> 中学生の感想を多く引き出すことで、小学生の意欲を高める。
2 学習の進め方について確認する。 <input type="checkbox"/> 学習の流れ <input type="checkbox"/> 時間 <input type="checkbox"/> 活動場所	2 学習の進め方について確認する。 <input type="checkbox"/> 学習の流れ <input type="checkbox"/> 時間 <input type="checkbox"/> 活動場所	<input type="checkbox"/> それぞれのグループの意見交換がスムーズに行くように、中学生がリードしながら話し合いが進むようにする。 <input type="checkbox"/> 場の工夫を行い、自分たちの演奏が十分に聴き取れるようにすることで、問題点が解決できるようにする。

<p>3 グループでめざす演奏と疑問点を発表し、表現の工夫を行う。</p> <p>○ 疑問点をポイントにした表現の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 音程</li> <li>● リズム</li> <li>● 表情 など</li> </ul> <p>4 今日学んだことをもとに演奏をする。また、中学生の演奏を聴いて、めざす演奏へのイメージをつかむ。</p> <p>○ 小学生の演奏</p> <p>○ 中学生の演奏</p> <p>○ 感想の記入と発表</p> <p>5 本時の学習をふり返り、次時の見通しをもつ。</p> <p>○ ふりかえりカードの記入</p>	<p>3 小学生の問題点をもとに、自分たちがアドバイスできることを考える。</p> <p>○ 問題点をポイントにしたアドバイス</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>● 音程</li> <li>● リズム</li> <li>● 表情 など</li> </ul> <p>4 小学生の演奏を聴き、本時の自分たちの取り組みがどのように達成されたかを知る。また、同じ曲を演奏し、小学生へ意欲をもたせるようにする。</p> <p>○ 小学生の演奏の聴取</p> <p>○ 中学生の演奏</p> <p>○ 感想の発表</p> <p>5 本時の学習をふり返り、今後の見通しをもつ。</p> <p>○ 各グループへのアドバイスカードへの記入</p>	<p>○ 中学生がスムーズにアドバイスが出来るように、事前にとっているアンケートをもとに活動するように説明する。</p> <p>○ 中学生の演奏をどのようなポイントで聴けばよいかを説明する。</p> <p>○ ふりかえりカードに記入することで、中学生との合同練習が自分たちの演奏の深まりにつながったことを感じ取れるようにする。</p>
---	--	---

## 2.3 前年度までの合同授業との違いと成果

### 2.3.1 人数の組み合わせの変更

小学生3名に対し中学生3名の6人グループによるグループ編成を行った。前年度までは10対10や1対1だったために、指導役の中学生が限定されたり、お互いにコミュニケーションがうまく取れないままで終わり、十分な指導ができない場面があった。3名の場合、言語的指示役や範唱役など、自然に中学生の役割分担が行われ、中学生の側に同じ方向性をもって小学生を指導していかなければならないという責任感が生まれた。

### 2.4 教師の積極的な介入

前年度までは、指導の場面を中学生の進行にゆだねていたが、今回は教師が、各グループや全体での指導に介入し、指導のポイントを絞らせたり、中学生の指導言を小学生に対して別の表現で伝えるなど、中学生と小学生のコミュニケーションを媒介する役割を果たした。

### 2.5 場所の限定

前年度までは、複数の教室を使って、グループ学習を分散して実施したが、今回は音楽室のみの場所にした。このため各グループがお互いの指導の内容や方法を確認しあいながら進めていくことができた。

## 3 今後の課題

合同授業を通じて、小学生の声の響き、テンポ感、また特に強弱表現のメリハリは格段に向上した。この点に関して合同授業の音楽的成果は明白である。

しかしながらその一方で、中学生が合同授業を通じて音楽的に何を学習したのかという点について明確に評価することができていない。

従来、異年齢集団学習における年長者側の学習意義は、社会的スキルの向上や主体的学習集団の構築という点から語られることが多かった。今回の合同授業の中でも、この点については十分な学習の機会が与えられた。このことは、中学生の感想からも伺える。

- 教え方やコミュニケーションの取り方が分からなく苦労したが、何とか上手に小学生に教えることで自分もすごく勉強になった。
- 自分が歌うだけではなく、教える立場になり教え方の難しさが分かった。

しかしながらこの合同授業が「ミニ教育実習」を通した社会的スキルの学習にとどまっているのであれば、音楽科の授業の成果としては不十分であろう。やはり「教える」行為を通じた、なんらかの音楽的な高まりを中学生の側にも保証すべきである。

この点について手がかりとなるのは中学生の次の感想である。

- 小学生に教えることで、今までの学習を振り返るきっかけになった。
- 合同授業を通して、自分がまだ十分に表現できていないことも分かった。

竹下が述べるように、音楽は本来それ自体が社会的行為であり、歌うことは「一般化された他者」からの評価を内在する行為である。しかしながら、普段の同年齢集団での音楽学習では、能力差が顕在化するため、一部の得意な生徒を除く多くの生徒は指示されるままに歌うことが学習の中心となってしまう。

こうした学習の中では、自らが発する音や音楽表現の特徴とそれに反応する人間的な感情との結びつきは、他者との共有の過程を経由しないために偏ったままになりやすい。

テイトらは、音楽的共有を「思考に富み感情豊かな音楽経験が、相互作用的な音楽行動を通じて具体化される、外的相互作用」と定義し、音楽についての思考と感情が共有されていない学習段階でのアンバランスな経験について次のように述べている。

我々は、感情が優位になったり、思考が優位になったりする場合のどちらも経験することになる。感情的な演奏は、演奏者の側の個人的な陶酔によって特徴づけられる。様式についての伝統と美的な精緻さへの関心がない。(中略)これとは逆に、過度に分析的で練習されつくした演奏もある。そうした演奏は多くの場合、運動が美を打ち負かすとも言ってよいような、非個人的で中身のない反応を作り出す'。

異年齢集団での学習では、全ての中学生が指導する立場に立たされることになる。音楽を人に「教える」ためには、習得すべき技能と発せられる声の質、演奏する楽曲についての知識と音楽表現の手立て、さらには一般化された聴き手の感情的反応の深さや幅との関連について語彙を念入りに選択しながら説明する作業を経なければならない。今回の合同授業の事前学習として、中学生が行ったワークシートによる記述は、この作業を促進する意図で実施されたものでもあった。さらに選択した説明の効果は、自分が教えた小学生の歌声の変化として直ちにフィー

ドバックされることになる。こうした音楽的な共有のプロセスを通じて、音楽に対する思考と感情の結びつきについての認識は精緻化していき、そのことが中学生自身の演奏の質を高めたり音楽に対する反応を豊かなものにすると考えられる。

5年間の研究成果として、教材選択のあり方、グループ学習の方法など、さまざまな課題は存在するが、異年齢集団での学習における最大の学びは、互いの成長過程を互いに客観的に把握できるところにあると考える。小学5年生は、中学生の発声法と表現法に将来の自分の姿を投影し、中学3年生は、小学生のそれに過去の自分の姿を投影することになる。また、児童・生徒の4年間の成長過程の軌跡は、指導者側にも学びの軌跡となって明らかにかえってくる。

今後は、小学生だけでなく、中学生の側の音楽的な学びのプロセスや成果をどのような方法で評価していくかが最大の課題となる。

### 注及び引用・参考文献

<sup>1</sup> 竹下英二『優しさと思いやりの育つ音楽科グループ学習』明治図書、1990年。

<sup>2</sup> 成田国英『<生きる力>を育てる異年齢集団活動の展開』明治図書、1996年。

<sup>3</sup> 宮崎大学教育文化学部附属中学校では、「読解力」を3つのプロセスと捉えている。3つのプロセスとは、「テキストを理解し、テキストから情報を取り出す場面（抽出）」「テキストを根拠にして、意味を明らかにし、説明する場面（解釈）」「テキストを根拠にして熟考し、自分の考えをテキストとして表現する場面（表現）」である。（宮崎大学教育文化学部附属中学校『<読解力>を育成するための学習指導法のあり方：授業展開の工夫と<読解力>育成の時間の充実を通して』平成20年度研究紀要、2008年）

<sup>4</sup> マルコム・テイト、ポール・ハック（千成俊夫、竹内俊一、山田潤次訳）『音楽教育の原理と方法』音楽之友社、1991年。